大谷保育協会の
「総合テーマ」についての研究
——『真宗保育』を中心に——

平野仁美

I．はじめに

現在、わが国の保育を支える保育所数は22,898幼稚園数は13,516、である(1)。

このうち真宗大谷派関係の保育所、幼稚園、その他の福祉施設は約500カ所（2011年大谷派大谷保育協会報告）あり保育現場の約1.4%が「社団法人大谷保育協会」に加盟している。

1899（明治32）年6月1日現在の上越市高田に高田大谷幼稚園が開設されて以来、真宗保育の長い歴史がはじまった。日本全国に点在する真宗大谷保育協会加盟園は、真宗保育の理念をベースにし、各園の独自性を大切に育みながらその時代背景に即した保育実践を展開してきたのである。

大谷保育協会は、1949（昭和24）年に蓮如上人四百五十回御誕忌を記念して創立したものである。そして、1957（昭和54）年には、宗教法人立等の保育所・幼稚園が社会福祉法人化・学校法人化する時代の流れの中で、真宗保育の実践を確保すべく文部省より9月4日に認可を受け、社団法人化したのである。

1982（昭和57）年7月に、第一回真宗同朋会議が開催されている。この会議において総合テーマ「共に生き共に育つ保育を実践しよう」（以後「総
平野 仁美

合テーマ」と表す）が宣言されたのである。

この総合テーマは、向後二年間の協会の方向性を見出すために生み出されたものであったが、以後30年間、大谷保育協会の歴史とともにゆらぐことなく大切にされ保育実践の現場に発信されてきた。

本協会は、2008（平成20年）8月に開催された第13回全国真宗保育研修大会において「真宗保育理念の宣言」をした。1983（昭和58年）年に先の「総合テーマ」が宣言されてから以降、今日まで真宗保育の実践を取り巻く環境や保育に対する社会意識と要求はさまざまなに変化してきている。

複雑な社会情勢のなかで、真宗保育の立脚地を確認する必然性を認識した大谷保育協会は、「総合テーマ」の根本であり原点である「本願」を表明し、真宗保育理念「本願に生き、ともに育ちあう保育」を宣言したのである。

しかし、「総合テーマ」で示されている内容の方向性は、「真宗保育理念の宣言」前後も変わることはないといえる。

本研究は、こうした現在の保育を支える真宗保育の「総合テーマ」を、本協会がどのように伝え、500カ所もの保育所・幼稚園がともに理解を深め、ともに育ち合う保育を実践しているのかを探るものである。

そこで、手はじめに『真宗保育のあゆみ―大谷保育協会 社団法人設立30年―』（社団法人大谷保育協会）を参照しながら、大谷保育協会で発行している『真宗保育』（No.1からNo.349）から分析するものである。

II.『真宗保育』の分析と考察

分析対象としては、大谷保育協会が社団法人化したことを記念して発行した、約30年間分の『真宗保育』（No.1からNo.349まで）を使用するものである。

以下の分析区分1から10は紙面内容が改訂されるごとに、その変化を分析し考察を加えたものである。

—114—
大谷保育協会の「総合テーマ」についての研究

1. 1982（昭和57）年7月から1987（昭和62）年1月（発行No1からNo63）（1）分析

1982（昭和57）年から1987（昭和62）年（発行No1からNo63）の5年間は、大谷保育協会が社団法人化した初期の頃であり、大谷保育協会の歴史を振り返りながら改めて「真宗保育」とは何かを明らかにし、大谷保育協会が生き続けてきた意味を確認している。

No.1からNo.5では、社団法人化された意味の解説や総合テーマ「共に生き、共に育つ保育を実践しよう」について、第一回同朋会議の内容などを整理し丁寧に伝えている。

No.3において、「共に生き、共に育つ保育」とは、子どもはむろんのこと、教諭、保母、園長、保護者、そして園をとりまく地域、住民もまた育てられる存在として、育てられ合う関係を広げていくことになる。正に高村順也と説明し、「育てられ合う関係とは、上下的関係ではなく、共におき中盤の上に立つ平等の関係を意味しますし、平等の生命と生命との呼応し合い、共鳴し合う関わり合いをもっていく生き方をそれぞれの立場に立つ場所から行っていくことなのです。」と伝えている。

また、「真宗保育確立への道は、真実を宗として私自身を問う姿勢から、保育を問い、施設のあり方を問い、地域を問い社会を問うことなのです。私自身の生きる上の問題として問うことなのです。」と伝え、「私自身の生きる上の問題とするということは、孤立した個の立場でというのではなく、共に生き、共に育つ関係のなかでということなのです。問うことが高い実践なのです、実践のつつ重ねこが真宗保育の確立への道なのです。」と真宗保育の実践についてまとめている。

No.4・5では、第一回の真宗保育同朋会議終了後、研究部、振興部各部が、それぞれの立場で今後の課題を見つけていく点から、この会議をどのように受け止めているかについて、確認することができる。研究部は、「真宗保育の確立を願って」、振興部では、「手を合わせ子と共に、手をとりあって」
平野 仁美

というテーマが生み出され、それぞれの立場を超えて理念を見つけ出そう、共通の言葉を見つけ出そうという協会はじまって以来の出来事を参加者が体感できたことを座談会形式で伝えている。

また、研究部からの研究課題について研究部の祖父江文宏は、「第１回の同朋会議で向後２年間の研究課題として設定された４つの柱の①は、真宗保育を考えさせる糸口です。真宗保育を顕らかにしていく４本の道です。」と述べ、「①きまり、約束、規律から保育を考える。②できる子できない子から保育を考える。③仲間、友たちから保育を考える。④競争心から保育を考える。」という４つの柱を挙げている。

No.6以降No.63までは、毎回有識者に原稿を依頼し１頁目の内容を構成している。

ここでは、それぞれの立場において真宗保育のテーマを意識した文章が担当した方々の体験や理論にもとづいて書かれている。

２頁目・３頁目では、各園の園長や保育者たちからの投稿記事により、現場での実践から生み出された内容を掲載している。さまざまな場所で同じように保育実践を積み重ねている仲間の存在を確認し、同じように悩み、思いを巡らしていることに気づくことが、これもまた共に育ち合うことなのだと実感した保育者もいると考えられる。

No.10からは、藤兼晃による「眼」というコラムがはじまっている。真宗保育における行事や保育実践の基本にふれた内容が簡潔にまとめられたものになっている。

(2) 考察

この５年間は、大谷保育協会が社団法人化されたことで、本協会の歴史を振り返りながら改めて「真宗保育とは何か」を明らかにしたり、本協会が生き続けてきた意味を確認したりしていることが理解できる。

No.3においては、「真宗保育」の読者は、テーマに関わる語句の意味解説

—116—
がなされており、それによって『真宗保育』の読者は、保育実践の糸口を見つけて出していくと考えられる。真宗保育の現場では、「総合テーマ」を念頭におきながら保育実践をつみ重ねていくように、繰り返しテーマの語句解説が発信されていることがわかる。

No.4・5では、会議終了後、それぞれの立場を超えて理念を見つけ出そう、共通の言葉を見つけ出そうという保育協会の意図が伝わる。この内容を座談会形式で伝えている点は、発言者同士の会話内容が伝わり、意見のやりとりをした参加者の考えも伝わりやすい。

また、研究部からの4つの研究課題内容の具体性が、真宗保育を考えさせ、以後、保育実践を行なう目的になると思われ、これを受けけて各園が研究を進める中で真宗保育のめざす実践を織り成していくことになるといえる。

No.6以降No.63までの文章内容から、『真宗保育』の読者は、さまざまな角度からの投げかけを受容しつつ「総合テーマ」と結びつけながら、保育実践へのヒントを得ていったと考えられる。

1頁目の内容は、担当した方々の体験や理論にもとづいて書かれているが、『総合テーマ』を根拠に意識して、文章が構成されていることが伝わってくる。真宗保育の考え方が毎回角度を変えて『真宗保育』の読者に伝わり、1頁目の記事としての意味を十分蓄えたものであるといえる。

2頁目・3頁目では、さまざまな場所でどのように保育実践を積み重ねている仲間の存在を確認し、同じように悩み、思いを巡らしていることに気づくことが、これもまた共に育ち合うことなのだと実感した保育者もいると考える。

「研究集会や第一回真宗保育研究大会」、「園長・設置者研修会」、「第二回真宗同朋会議」、「第三回真宗保育会議」、「第三回真宗同朋会議」の開催への願いや報告は、この紙面で会員に公表され会議内容の説明や意義・感想、今後の課題等も細かく丁寧に伝えられていることが『真宗保育』から
読み取れる。

No.10からはじまったコラム「眼」は、大変分かりやすく『真宗保育』の読者に伝わるものだと評価できる。この特集は、紙面内容が改訂しても残され、『真宗保育』の読者に真宗保育のポイントを毎回伝え続けている。わかりやすさと読みやすさが16年間続いた要素であるとしている。コラムは、No.199まで続きNo.13のみ掲載がないだけで実に189の記事が書かれている。『真宗保育』の読者に対し、ここからも確実に「総合テーマ」の内容が発信されていたといえる。

2. 1988（昭和63）年3月から1989（昭和64）年1月（発行No.64からNo.76）
（1）分析
『真宗保育』を発行して、はじめて紙面内容の改訂があった。
5年間で、1頁目に登場した有識者は48人にのぼる。今回の改訂では、1頁目でとりあげていた内容が裏面に位置をかえている。しかし、存続させる意味が十分ある内容であったため残されたことがわかる。代わって1頁目は、保育の実践場面の写真と共に子どもたちの生活に関する内容になり、子どもの姿と学ぶべきポイントが整理され、真宗保育のなかに流れる考え方の解説を筆者が伝える記事となっている。
No.64からの一年間は、本協会の役員（井伊京子、近藤辰雄、十時寿徳、祖父江文宏）が中心になって文章を書いている。

真宗保育を通して、人間は完全なものではなく、自分の欠点を謙虚に認めることは大切であること。自分の不完全さを信じることが、教師と子どもとの信頼を回復する力となり得ること。自分を学ぶことも教育には必要なことなどを各人の個性や豊な知識をもとに、保育を通して寄り添う大人への提言というかたちをとっている。

以上のように1頁目の内容から“ともに生き ともに育ち合う保育”への確認や思いの視点の投げかけをして、読者に『真宗保育』の「総合テーマ"
マ」を改めて伝える工夫をしたといえる。

他にも改訂し差し替えられた内容としては、「あゆみ」と「しんしゅうこどもカレンダー「子どものつぶやき」」がある。「あゆみ」では、各園に記事を依頼し実践場面からの思いを文章化して掲載している。また、「しんしゅうこどもカレンダー「子どものつぶやき」では、保育場面での子どものつぶやきを収集し、それに解説を加えた内容を掲載している。

(2) 考察

この時期に、『真宗保育』発行後1回目の紙面改訂があった。5年間の節目に『真宗保育』の読者に発信の内容変化をすることで、目新しさや新鮮さ読みやすさを追求しようとする本協会の配慮であると考える。

1頁目の保育実践場面の写真と子どもたちの生活に関する内容の掲載は、「共に生き 共に育ち合う保育」への確認や思いの視点の投げかけをして、『真宗保育』の読者に真宗保育のなかに流れる考えを改めて伝えたかったのではと考える。

2頁目の内容は、5年間1頁目の記事として掲載して来た、有識者の文章を2頁目へと位置換えして存続させている。『真宗保育』を伝えるのに外部からの刺激は、その時々の担当者からのエピソードが新鮮で、非常に意味がある内容であったために残されたのであると推察する。

3頁目の新設された改訂内容については、紙面から子どもの姿を目に浮かべられ、『真宗保育』の読者を楽しませる効果があったと思われる。

“あゆみ”では、各園からの記事を読むことで、共に生きる保育実践を共有し、自分の実践場面と置き換えて考えることができる。このことがマンネリ化した実践を考え直すスパイスの役割を果たすのである。

もう一つの改訂内容からは、子どもの気づきや視点の鋭さを発見することができる。また、改めて子どもを愛おしいと思ったり、ドッキリしたりする中で子どもを見る眼が変わり、保育を楽しめる資質が身に着く可能性
平野仁美

も出てくると考える。どちらも子どもの姿をイメージすることで、自己の
思いを膨らませたり、『真宗保育』の読者同士共感しあったり、ほほえんだ
りできる内容であり、『真宗保育』の読者は、新鮮な気持ちで紙面改訂を受
け止め次号を楽しみに待つ状況があらわれるのでないだろうか。
4頁目の『コラム 眼』は、真宗保育における行事や保育実践の基本にある
れた内容が簡潔にまとめられているため、改訂後も残され、読み手に真宗
保育のポイントを毎回伝えているのである。

3. 1989（平成1）年2月から1991（平成3）年12月（発行№77から№111）
(1) 分析
今回の改訂は、全体的に大きな変化ではない。“あゆみ”に代わり“ひ
とこと言わせて……母娘のほんね、ほんね、ほんね、たてまえ、たてま
え、たてまえ”になった。
このコーナーは、主に園児の保護者の方々からの投稿文で構成されてい
る。本協会内の各支部を巡りながら、どのような内容にするかは担当に当
たった園の工夫が施されている。保護者の悩み、感謝、子どもからの発見、
などが書かれたものやAさんの文をBさんが読み感想を述べたり、アドバ
イスしたりする記事や自己の体験談などを紹介している。また、保護者と
保育者の交換ノートの内容が掲載されていることもあった。
1989（平成1）年2月から1991（平成3）年12月の時期では、「真宗保
育」を伝え続ける営みの記事は、1頁目で取り上げられ、事例を挙げ、協会
理事各氏が自己の学びの豊かさや体験にもとづいて、『真宗保育』読者に考
えて欲しい視点を伝えている。毎回のコラム「眼」では、藤の一貫した真宗
保育の思想をもとに、今の保育実践に必要なことが取り上げられていた。

(2) 考察
この時期は元号が「昭和」から「平成」へと移行した時期であり、第2
回目の紙面改訂が行われている。その内容から時々の工夫がされ、読み手を楽しませたことが伝わってくる。

平成という新時代を迎えたことで、「保護者も保育をする人である」という意味を改めて考えるという社会状況を反映したのが3頁目の「母親の本ね、ほんね、ほんね、たてまえ、たてまえ、たてまえ」であり、「総合テーマ」を意識して開設したと考えられる。このことは『真宗保育』の読者層を広げようとする努力ともいえ、内容的には、専門職向けの読み物から、保育をする多くの人々（家庭や地域住民）が読んでわかるものへと変化したのだと考える。

保育の場合、地域や家庭との連携をとり進められるものだという意識が高まり始めていることが『真宗保育』の構成内容から理解できる。この点は「保育所保育指針改訂の影響も受けているのではないかと考えられる。

しかし、1・2頁目の変化はなく、今までどおりのレイアウトと内容であるが、「真宗保育」を伝え続ける営みの記事は、1頁目で取りあげられている。『真宗保育』の読者へ、「総合テーマ」を意識した事例を挙げたり、協会理事各氏の学びの豊かさから伝えたり、角度をかえながら現場へ発信し続けているのである。また、有識者からの記事もその時々で文章を書いた人の個性が生きており、真宗保育を実践するときにこの記事が影響を与えていくことが読んでいて伝わってくるものである。

毎回のコラム「眼」では、藤の一貫した真宗保育の思想をもとに、今の保育実践に必要なことが取り上げて書かれており、非常に的確、明瞭で理解しやすい内容が具体的に示されていると評価できる。

この時期、「幼稚園教育要領」や「保育所保育指針」の大きな改訂があり、現場の保育は、これにどのように対応していくかで大きく揺れ動いていた。しかし、『真宗保育』には、今回の改訂に触れた記事はどこにも見当たらない。したがって、本協会は、一貫して、「総合テーマ」を重視した保育実践の追究や発信を常に続けてきたことが理解できる。
4. 1992（平成4）年1月から1993（平成5）年12月（発行No112からNo135）

(1) 分析
No.112 から，“ひとこと言えば……母親のほんね、ほんね、ほんね、たてまえ、たてまえ、たてまえ”に代わり“ほんね、たてまえ”という表題になった。内容は、保育実践のなかで出会ったことなどのエピソードが紹介されている。掲載文の提供は、保護者から保育者に移行している。また、“しんしゅうこどもカレンダー「子どものつぶやき」”が“こどものつぶやき”となり、子どもがつぶやいた言葉のみの掲載となっている。他の頁内容は、変化していない。

(2) 考察
第3回目の紙面改訂がされたが、内容は画期的には変化していない。
1頁目の内容では、本協会役員が担当し、毎回、保育実践の中に生かしてほしい言葉の投げかけがある。例えば、No.112 では、「おちこぼれ」に対して約800字程度の文章が書かれている。筆者の体験エピソードから、題「おちこぼれ」への想いや伝える内容から真宗保育の考え方を伝える教訓的内容の文章が書かれているといえる。

「落ちこぼれと問題児がシナニミック（同音義語）であるかどうか、その議論はここでは措こう。ただ、ノーマルな状態でないことは共通している、と思う。『愚か者になりて往生する』という聖典のお言葉があるが、私は、今日までこのことばに導かれ、幾多の深い感動と感慨を覚え、勇気づけられてきたかわらない。どこかで、自分を本当に信じ、愛していてくれる人に出会えば、人は、トラブルを解決し、自立に向かう本物の人生を生き抜いていけるのではないかと思う」としめしくている。

このような内容に繰り返し出会えることで、保育者は、保育実践の行き詰まりを解決するヒントを得ることができるのである。そういう意味でも1頁目の内容が果たす役割は大きいと考える。
大谷保育協会の「総合テーマ」についての研究

2頁目の内容も変化はしていないが、「総合テーマ」を保育の現場にて発信する効果を十分ほどこしていると考えられる。同じ人物が再登場しないところに、本協会の人脈の広さを感じ、学びの幅の広がりが理解できる。

変化した3頁目の内容の中では、とくに「しんしゅうこどもカレンダー
子どものつぶやき」が「子どものつぶやき」となり、子どもがつぶやいた
言葉のみの掲載となった点が注目される。つぶやきの現場にいた先生の解
説により、このような時どう接するかのヒントを得ることができる。子ども
をよく観察し、どのような場面からこのような言葉が生まれたのかを知っ
ている保育者であることが大切なのだと考えられる。ただ、子どものこと
ばは面白いと受け止めるのみにとどまらないようにしたいものである。

4頁目のコラム「眼」については、保育内容「領域」について書かれてい
る点に注目できる。この内容からは、本協会にも文部科学省や厚生労働省
の告示文や通達文の内容に触れている点、幼・保それぞれの立場から子ど
もを見る保育内容に触れている点は今までになかったとのことであり、この解
説文の内容に非常に興味をもつことができる。藤の解釈が、真宗保育の中
で保育内容「領域」を理解するための指標として受け取られる可能性もある
ため、このように保育の参考として気づいていく投げかけはあってもよ
いと考える。

5. 1994（平成6）年1月から1999（平成11）年4月（発行№136から№199）
(1) 分析

第4回目的紙面改訂が行われている。

№136から3頁目の内容である“ほんね、たてまえ”のコーナーが“であい、
値遇”に代わり，“子どものつぶやき”が姿を消している。“であい、
値遇”では、サブテーマを設定し、№136から№148までは“どのようにであいも実は真理とであっているのだ”、№149から№198までは、“であいを
準備することはできないが、であいの準備をするためのできる”と2つを
あげている。保育実践の積み重ねのなかでさまざまな出会いがあり、その出会いのなかで子どもや大人が育ったという内容がサブテーマの視点で書かれている。内容の文章は、保育者や保護者に依頼して書いてもらっている。

また、No.199 の 1 頁目ではコラム「眼」のなかで“真宗保育会い難し”と題し出会いを特集し、共に生きていくなかでの出会いの意味などにもふれ「総合テーマ」を意識していることが示されている。

他の頁の内容には変化はなく、『真宗保育』を支える 3 本柱が確立され、本協会の「総合テーマ」理解の発信は、エンドレスリレーのように長きに渡り示され続けているのである。

(2) 考察

この時期は、『真宗保育』の読者に「総合テーマ」を伝える手段として、3 本柱を中心に発信されているといえる。

1 頁目の文章担当者は、真宗保育を実践している園関係者や園長などである。身近で、わかりやすくポイントをそろそろ伝えているといえる。

3 頁目、No.136 から始まった“であい、癒し”では、サブテーマを設定することで、それを窓口として総合テーマと関連付けをしている。

また、No.199 ではトップ記事は“出会い”について、コラム「眼」では“真宗保育会い難し”と題し出会いを特集し共に生きていくなかでの出会いの意味などにもふれたことから、総合テーマにもとづいた実践が展開されることを意識していると考える。

6. 1999（平成 11）年 5 月から 2001（平成 13）年 12 月（発行No.200 からNo.231）
(1) 分析

1999（平成 11）年に『真宗保育』は記念すべきNo.200 を発行している。そして、No.201 から第 5 回目前半面改訂をしたのである。その改定にお
大谷保育協会の「総合テーマ」についての研究

いて、保育者だけでなく保護者にも読みやすい紙面内容にして、紙の大きさもB4版からA3版に変えている。
『真宗保育』No.200は、記念号として頁数を倍にして発行し、『真宗保育』の趣旨や発行の経緯が記載されている。その中で藤は、『真宗』誌と『真宗保育』紙との立場の違いと共通点を説明している。
ここでの改訂内容は以下のとおりである。
「保育者だけでなく、保護者の方にも読みやすい内容・紙面になります。月々にテーマを掲げ、日常生活での疑問などをわかりやすく書いていただきます。
○1ページ テーマに関するコメント
○2ページ テーマの具体例（本協会加盟園から）
○3ページ 今の子どもたちを見て感じておられることを各方面の先生にお書きいただきます。
○4ページ Q&A（子育てのことや保育現場での疑問についてお答えします）と公表している。

(2) 考察
本協会は、No.200を節目として、今一度、原点にもどり、『真宗保育』を発行し、世に問い続けて来たことの確認をしたかったのだと考える。No.200の特集内容からは、人間理解の根本に真宗仏教を仰ぎ「総合テーマ」を伝えることで、真宗保育の実践の意味を共有し合い、繋がりあう生涯学習を目指して歩んできたことを『真宗保育』の読者に伝え続けてきたことが理解できる。
特集号は、『真宗保育』発行当初は丁寧に説明されていた「総合テーマ」の内容が、時の流れとともに表だって説明はしなくなっていたことに気づいたことから出発したのだと思われる。協会の意図を満載し、改めて丁寧に『真宗保育』誕生についても触れている点からわかる。

—125—
しかし、本協会は、「総合テーマ」だけは今まで発行されて来たどの号にも掲載し、伝え続けている。これは、ある意味で流行を敏感に取り込み保育に生かすのが得意な保育者集団に対して、本協会が貫き通してふれな
い努力をして来たものであるといえる。真宗保育の「総合テーマ」を後世に伝え、世代交代があったとしても実践を実践でつなぎ紡ぎあげながら保
育の質を追究しようという本協会の願いであると考える。

No.201からの改訂内容を見ていくと、1頁目は、ともに生きともに育ちあ
うさまざまな状況を端的な言葉であらわしている。テーマに関する想いを、
住職・園長・大学教授などの真宗仏教を熟知した方々が文章で伝えている。
その内容は、保育場面であったり、日常生活の場面であったり、読者のイ
メージしやすい状況が設定されそれぞれの場面についてわかりやすく伝え
ている点は、保育を実践しようとするときに、大いに役立つと考えられる。

2頁目は、1頁目の内容を「真宗保育」の現場の声として、本協会加盟園
の保育実践場面からのエピソードをまじえて紹介している。

「総合テーマ」をより身近に感じながら「真宗保育」の理解を深め学び
合える内容になっている。エピソードは、見えない保育を見るものにし、
読者は、自己体験と重ね合わせてイメージしていくことができる。『真宗保
育』の読者は、自分に一番わかりやすい方法で解釈できるので意味がある
と考える。

3頁目に書かれた内容は、執筆者の豊かさや奥深さを感じずにはいられない
ものである。子ども理解は難しいのではなく、奥が深いことを改めて実
感させられた。本協会の「総合テーマ」を実現していくための多くの学び
の提供が、このページから発信されているといえる。感銘を受ける内容が
保育者に伝わり、保育実践に生かされるのだと考える。
7. 2002（平成14）年1月から2008（平成21）年5月（発行No232からNo308）
（1）分析
第6回目の紙面改訂である。
2002（平成14）年1月からの『真宗保育』は、見た目のデザインやコーナーレイアウトの変化があった。No.201からの紙面改訂は、『真宗保育』の読者が読みやすい、読みたくなることを念頭においたことから、保育者だけでなく、保護者の方にも読みやすい内容・紙面となった。月々に小テーマを掲げ、1頁目では、テーマに関しての筆者からの想いを伝えている。2頁目は、小テーマの具体例（本協会加盟園から）、3頁目は、今の子どもたちを見て感じていることを各方面的先生方が書きおろし、4頁目は、保育と育児に対するQ&Aという内容を柱としておりこの構成変化はない。
テーマに対する想いの文章もほとんど同じ方々が交代で書いているが、2・3人新しい顔ぶれが加わっている。しかし、内容の取り扱い方の変化はない。

（2）考察
今回の紙面改訂は、『真宗保育』の読者へ伝える内容の変化はないことが逆に特徴だといえる。紙面の見た目の変化だけにこだわり、デザインや頁面の見た目のレイアウトを変え、読者に新鮮感を与えたのみである。
内容の変化はないが、『真宗保育』からは、揺ぎなく「総合テーマ」を伝え続ける、ぶれない本協会の姿勢が伝わる。

8. 2008（平成21）年7月から2009（平成22）年9月（発行No310からNo324）
（1）分析
第7回目の紙面内容の改訂である。
2008（平成21）年7月発行No.310からは、テーマの具体例（本協会加盟園から）“真宗保育の現場の声”と“こどもの今”のコーナーが姿を消し、代
わって登場したのが、「保育心理」紹介シリーズである。

この頁では、本協会が取り組んできた保育心理士養成講義の内容を集約し、体系化して牧野桂一が山田真由美と共著で出版した『保育心理』（2007.11.30）という著書をもとに、毎回掲載内容を吟味し記載している。

(2) 考察

現在の保育現場の大変さは、様々な育ちの子どもが入所して来て、その対応は半端なものではない。保育者は、個々の子どもあらわす状況への適切な対応が望まれるため、そのニーズにこたえて、この頁の内容が登場してきたのだと考える。

牧野はNo.310において「それぞれの保育現場が、本書で提案しているような特別な保育ニーズをもつ子どもの保育を推進し進めていけば、そのことがそのまま、一人ひとりの子どもが真に大切にされるような保育を創造することになるということが理解されると思います」(13)と述べている。全ての子どもが大切にされ、一つの命を授かってきた子どもとして、その子の個性と向き合ってきた「真宗保育」の現場に適切な知識を持って対応することの必要性が伝えられたといえる。保育現場に正しく導入することで、子どもたちの個性やリスク・落ち込みに丁寧に向き合え、過しやすさを提供できるといえる。

ここに、ともに育ち合う保育実践の資質向上させていこうという、本協会の姿勢が示されたといえる。

9. 2009（平成21）年10月から2010（平成22）年9月（発行No.325からNo.336）
(1) 分析

第8回目の紙面改訂である。

No.325から紙面が改訂され、あらためて真宗保育について考える頁が設けられている。真宗保育に関わるものが、どのような保育実践を指して、「真

— 128 —
宗保育である」とするのか、大谷大学の富岡量秀が読者と一緒に考え、深め、具体的にしていく視点を提供している。富岡は、真宗保育理念について丁寧に触れ解説している。

No.325では、真宗保育理念の背景について、No.356では、真宗保育理念を考えながら「なぜ『本願に生き』と確かめるのでしょうか？」について、No.327では、真宗保育理念から「ともに」ということについて、それぞれを丁寧に説明している。

No.328では、脇淵徹彦（社団法人本協会理事長）が「仏にうながされ、この子らとともに」と題して、社会情勢や国の施策のなかで本協会として揺ぎ無く自園設立の理念を尋ねることで、「真宗寺院が幼稚園や保育園の運営に関わることの意味を国が示す指針や基準や条例の中に探してもあるはずはありません。宗祖親鸞聖人があきらかにされた仏道にこそ求めるべきであり、そこにしか真宗保育の眼目はありません。私たちはそういう歩を共にしたいと願っている」([9])と伝え、大きな変革期を乗り越えていくべき考えを述べている。

4頁目では、引き続き「保育心理」シリーズは、牧野が担当している。No.325で16回目を迎えNo.336までの12回に渡り「保育心理援助法」アプローチプログラムを丁寧に紹介している。

牧野は、保育心理援助法の具体例を挙げ、①援助法の概要、②具体的な内容の解説、③保育園や幼稚園における活用の仕方を紹介している。

「保育心理」シリーズは、2009（平成21）年10月発行No.325から今まで2頁にわたってであったが1頁になった。保育現場で活用できるように、保育心理研究会がサポートしていくと読者に伝えている。

2頁目は、「子どもの絵画」と「ひとこと詩のコーナーができた。

「子どもの絵画」は、「子どもは、ことばでは表現できない自分の内面を、絵のなかに表現しています。どのような思いや、保育者の関わりを表現しているのでしょうか。子ども絵画をとおして考えます。」([9])というコメン
トがこのコーナーへの思いを説明している。そして、子どもの絵の下にエピソード記述が添えられ、この絵から伝えたいものを発信している。

3頁目は、本協会加盟園の紹介であり、Q&A方式で保護者の質問に答えるコーナーであったり、食育を考えるコーナーを交互に掲載している。

(2) 考察
No.325からの紙面改訂では、あらためて真宗保育について考える頁では、大谷大学の富岡英秀が保育実践の視点を提供している。この企画は、改めて「真宗保育」を確認でき、理解が深まると実感できる。
3頁目の内容は、読者に親しみ深い内容の提示をし、家庭と園との連携への配慮がなされたのだと考える。また、紙面の工夫は、見た目も以前のものと比べてラフな感じをとる。現代社会の世相を繁栄し、読者層の変化に伴い、「総合テーマ」の伝え方やその方法にも工夫を感じる。園紹介、Q&A、食育の3つの内容を交互に取り抜き紙面を変化させながら、『真宗保育』の読者に親しみ深い内容の提示をし、家庭と園との連携への配慮がなされている。
このような紙面の工夫は、見た目も以前の『真宗保育』と比較すると、気楽に読みたくなる感じをとる。現代社会の世相を繁栄し、読者層の変化に伴い、「ともに生き とともに育ち合う 保育を実践しよう」の伝え方の工夫をもたらしているようである。
しかし、全紙面をトータルすると「総合テーマ」の根本的な内容は、揺るがず伝え続けている。この点が、「真宗保育」を実践する本協会の骨太さを実感するところである。

10．2010（平成22年10月）から2011（平成23年10月）発行№337 から№349
(1) 分析
第9回目の紙面改訂は、紙面内容の一部変化である。
大谷保育協会の「総合テーマ」についての研究

2008（平成20）年7月発行No.310から登場した牧野桂一（筑紫女学園大学教授）が担当してきた「保育心理」紹介シリーズに代わり、「真宗保育の眼」が登場する。

1頁目では、引き続き大谷大学の富岡量秀が総合テーマへの理解を深めるために『真宗保育』の読者と一緒に考え、深め、具体的にしていく視点を提供し、「真宗保育」をきめ細かく理解できる設定がされている。

(2) 考察

「保育心理」紹介シリーズに代わって『真宗保育』No.337からは、「真宗保育の眼」を掲載するようになった。そのコーナーでは、毎回同じ前書きが記載されている。

紹介文を引用し意図を確認する。

「保育・教育・子育てにおいて、何か大切なことなのか。それらの問いは、実は自分が何を一番大切にしているか、そして自分とは何かを問われていることに他なりません。それらの問いは、日々の生活の中でさまざまなに出逢う自分とあらゆる人やものとの関かれた関係の道しるべになるでしょう。真宗保育についてさまざまな視点から教えてくださいました故藤兼晃先生（前本協会顧問・前大野幼稚園園長）からのお言葉を通して、真宗保育にかけられた思いをたしかめます」と記載されている。

この内容は、総合テーマを伝えその内容を理解するには適切だと考えられる。長年にわたり協会の発展に貢献してきた藤氏の御逝去を悼み改めて氏の偉大さを伝える企画であったと考える。毎回の掲載内容は、コラム「眼」としてNo.10からNo.199までの16年間で189冊がされた言葉の中から選び載せている。
藤からの的確な発信を今の読者に伝え、改めて「真宗保育」を学ぶコーナーとして設定されたのだと考える。

1頁目で取り上げている真宗保育理解コーナーでの富岡の内容の進め方は、「はじめに」で前回の内容確認をし、今回のテーマへ流れる言葉を述べ、「次
に」本論の展開のなかでテーマにふれ、最後に「おわりに」としてしめくくり、真宗保育と結びつけ理解を促し、保育実践へと繋がっていくことを願っているのだと考えられる。

III. おわりに

本論では、「社団法人大谷保育協会」に加盟している真宗大谷派関係の約500ヶ所の保育現場がつながりあい、保育実践を積み重ねるために、「総合テーマ」をどのように理解し、伝えられてきたのかを『真宗保育』を基に検討した。1から10までの時代区切りで紙面内容を1頁目から4頁目をみていくと、30年間に『真宗保育』が大きく変化したのは、『真宗保育』No.200発行の6回目の改訂の時期（7.2002（平成14）年1月から2008（平成21）年5月（発行No.232からNo.308））であることがわかる。

2002（平成14）年の時期は、幼児教育・保育界において変化のあった年ではない。

本協会が社団法人になってこの年で20年となること、『真宗保育』No.200発行を記念し改訂をおこなったのである。『真宗保育』の読者に対し、今後も『真宗保育』発行を通して、総合テーマを伝え続ける担い手として『真宗保育』の果す役割を大きく評価し期待している本協会の意志のあらわれであると考える。

No.200以前と以後の区切りは、紙面の大きさの変化はあるが掲載内容の変化は目立つものではない。10回の改訂を通して紙面内容が目まぐるしく変化しているわけではないことも今回の『真宗保育』分析からわかった。『真宗保育』は4つの内容構成が頁ごとに扱われている。この形は、『真宗保育』349枚にほぼ共通している。この構成が用いられない時は、会議報告やテーマを改めて確認したいときなどであった。

『真宗保育』は、時代とともに変化する読者や社会情勢などを考慮し、
保育実践のエピソードをあげたり、コメントを記載したり、子どものつぶやきや絵画などを通じて「総合テーマ」に繋がる工夫を企画しながら改訂してきた。そこには、一貫して本協会が「真宗保育」を実現するために、『真宗保育』を発行し、「総合テーマ」を伝え続けてきたことが理解できる。

また、1頁目、2頁目の取り扱いの中で、有識者のコメント記事を大切に扱い、外側から真宗保育の求めるものを伝え、本協会の役員が中心になって文章を書き、内側から「真宗保育」の真髄を伝えていることから、本協会の人材の豊かさや幅広い人間関係の奥深さがわかる。

更に、藤によるコラム「眼」を16年間（No.10からNo.199内189編）掲載し続けて来たことから、本協会の「総合テーマ」を伝えようとしている姿勢がこの『真宗保育』の役割だということがわかるのである。

その結果、本協会の果たしてきた30年のあゆみとともに、発行し続けた『真宗保育』は、絶え間なく「総合テーマ」を伝える紙面構成と内容を一貫して行ってきた。また、紙面の向こうにいる読者から目をそらさず、30年間で9回の改訂を行い読みたくなる工夫をし、発行し続けているのである。

30年に発行した『真宗保育』は、2011年10月で349枚におよぶが、紙面を4分割にし、頁ごとにコンセプトをもって内容構成の工夫をしている。

しかし、各頁の根底には「真宗保育」の目指すテーマを伝えるという視点が常にあったことが理解できる。

読者に読んでもらい、伝えたい内容の理解が促されなければならない。紙面改訂はこういう視点から繰り返され工夫されるということは、『真宗保育』に限らないことである。改訂して変えるもの、変えずに残すものを吟味し読みやすい、読まれやすい、読みたくなる、だから次号を楽しみにする、読み続けるためにたゆまぬ努力を積み重ねてきた本協会が、30年間発行し続けたものが『真宗保育』であるといえる。「総合テーマ」を伝え、子どもたちを利用し、育てる保育実践のために今後の内容の充実に期待
するものである。

筆者の今後の課題として、1つ目は、保育現場に出向き「総合テーマ」を受け止め、保育がどのように「真宗保育」の現場で実践・展開されているのかを観察し、2008年に宣言された「真宗保育理念」を拠りどころとした保育実践がどのようにおこなわれているのかを検討する必要がある。

2つ目は、「真宗保育理念」が各園の「保育理念」や「保育方法の工夫」にどのように生かされているのかを聴き取り調査をおこない分析していきたいと考える。
表-1

<table>
<thead>
<tr>
<th>発刊番号</th>
<th>発刊年月日</th>
<th>1頁目 内容と執筆者</th>
<th>2頁目 内容と執筆者</th>
<th>3頁目 内容と執筆者</th>
<th>4頁目 内容と執筆者</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1</td>
<td>1982年7月20日</td>
<td>真宗保育の願うもの 大谷保育協会社団化の意味 大谷保育協会研究部長 祖父江文宏</td>
<td>真宗保育の願うもの 大谷保育協会社団化の意味 大谷保育協会研究部長 祖父江文宏</td>
<td>振興部の課題 振興部長 五島行宣</td>
<td>海は語る いのちのはげみ 大谷保育協会理事長 井伊各量</td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
<td>1982年8月20日</td>
<td>真宗保育の願うもの 大谷保育協会社団化の意味 大谷保育協会研究部長 祖父江文宏</td>
<td>真宗保育の願うもの 大谷保育協会社団化の意味 大谷保育協会研究部長 祖父江文宏</td>
<td>職場に於いて仏道に立つ 大野幼稚園 藤兼晃</td>
<td>「命の平等について」 木田幼稚園教諭 田中裕子</td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
<td>1982年9月20日</td>
<td>総合テーマについて 共に生き、共に育つ保育を実践しよう</td>
<td>研究部研究目標について「真宗保育の確立を願って」</td>
<td>振興部実践目標について</td>
<td>振興部実践目標について</td>
</tr>
<tr>
<td>4</td>
<td>1982年10月20日</td>
<td>第一回 同朋会議を終わって 座談会＝（上）</td>
<td>第一回 同朋会議を終わって 座談会＝（上）</td>
<td>第一回 同朋会議を終わって 座談会＝（上）</td>
<td>第一回 同朋会議を終わって 座談会＝（上）</td>
</tr>
<tr>
<td>5</td>
<td>1982年11月20日</td>
<td>第一回 同朋会議を終わって 座談会＝（下）</td>
<td>第一回 同朋会議を終わって 座談会＝（下）</td>
<td>第一回 同朋会議を終わって 座談会＝（下）</td>
<td>第一回 同朋会議を終わって 座談会＝（下）</td>
</tr>
</tbody>
</table>
平野仁美

(5) 1994（平成6）年1月から1999（平成11）年4月（発行No.136からNo.199）
【1頁目：題目と文章の担当者名】
・No.136－138「子どもにはわからない、子どもだから分かる(1)(2)(3)」
（本協会副理事長：長尾寺德瑞）
・No.139－138「いきものとのかかわり(1)(2)(3)」（本協会事務部長：川田彰心）
・No.142「衣がえ」No.143「いま幼稚園では」No.144「教育を考える」
（本協会 事業部長：露見緒）
・No.145－147「命を大切に」(1)(2)(3)」（本協会振興部長：杉田倉仙）
・No.148「命の流れの中で」（本協会岡崎支部旁型保育園長：安藤八寿子）
・No.149「いいない・おもしろいね」（本協会金沢支部長：藤原徳懐）
・No.150「ひかるいのち」（小松大谷幼稚園園長：永山了賢）
・No.151「幼児に聞いてもらいたいこと」（大阪支部；野間大雄）
・No.152「たしかな“であい”」（(社)本協会理事長；近藤辰雄）
・No.153「いきているってなぁに」（花園大谷幼稚園；辰村和子）
・No.154「いのちの尊厳と共感」（正雲寺保育園理事長；寿台順潮）
・No.155「保育環境を考える」（野里保育所；藤川宗暢）
・No.156「環境と感性」（月隈幼稚園；武内一美）
・No.157「遊ぶということ」（本協会副理事長：長尾寺德瑞）
・No.158「朝礼」（本協会三重支部長：河村光子）
・No.159「真宗と保育」（清見保育園；夏野由近）
・No.160「ちかいの言葉」（福寿保育園；小林法寿）
・No.161「力の根」（銀の鈴幼稚園；五島 潤）
・No.162「真宗保育と生活文化」（常葉幼稚園；牧野豊丸）
・No.163「前提を“問う”」（蓮の実保育園；蓮田善英）
・No.164「今、私たちは」（宝林保育園；林 顕秀）
・No.165「御遺念テーマに思う」（高倉幼稚園；近藤辰雄）
・No.166「保育施設はどこへいくか」（市橋保育園園長；鷹橋賢生）
・No.167「伝わることば」（田尻德風保育園；村田晃洋）
・No.168「実践者としての真宗保育」（くおん保育園；有馬鶴雄）
・No.169「同朋社会に流れるもの」（米沢幼稚園園長；井上 雅）
・No.170「みんないっしょ」（徳風幼稚園；祖父江章子）
・No.171「三階仏に思う」（高倉幼稚園；近藤辰雄）
・No.172「帰依するもの」（本協会理事長；古賀文雄）
・No.173「なじらね真宗保育」（深沢保育園；菅原文芳）
・No.174「いじめを考える」（城北幼稚園；三浦俊彦）
・No.175「いのち」（塩谷大谷幼稚園；樋谷一裕）
・No.176「「育ち」ということ」（松原保育園；中嶋顕真）
・No.177「いのちの箱」（緑丘幼稚園；河野ケイ子）
・No.178「子育て支援」（銀の鈴幼稚園；五島 謙）
・No.179「私には分からない」（光明幼稚園；浅野正順）
・No.180「ともに生きる」（新潟中央幼稚園；今波良敬）
・No.181、No.182「ものみな育ち合う中で(Ⅰ)(Ⅱ)」（宝林保育園；林 顕秀）

—136—
大谷保育協会の「総合テーマ」についての研究

・No.183 「古典に見る子どもの世界」（野里保育所：藤川宗憲）
・No.184 「幼児の発言に耳を傾けよう」（本協会理事長：藤 兼晃）
・No.185 「であいかからの感動」（野里保育所：藤川宗憲）
・No.186・No.187 「とやく（I・II）」（アソカ幼稚園：齋藤美智子）
・No.188「子どもたちの今」（鹿児島大谷幼稚園：佐々木智憲）
・No.189・No.190「旅師に学ぶ（一）（二）」（城東保育園理事長：長久寺徳瑞）
・No.191・No.192「保育のことばを考える」（城北幼稚園：三浦俊彦）
・No.192「保育のことばを考える（2）」（城北幼稚園：三浦俊彦）
・No.193「とも同行」として）（宝林保育園：林 顕秀）
・No.194「ともに」ということ）（宝林保育園：林 顕秀）
・No.195「基本的生活生活観の提言」（はすねだ保育園：川田彰心）
・No.196「年頭言」（本本保育園理事長：藤 兼晃）
・No.197「この時期 この子たちに」（まどか第二保育園：藤原徳悠）
・No.198「心の対話」（みと鶴第二幼稚園：河野道介）
・No.199「出会い」（すみれ保育園：近藤 章）

(6) 1999（平成 11）年 5 月から 2001（平成 13）年 12 月（発行No.200 からNo.231）
【1頁目：テーマ題目と編著】
・No.201 テーマ「いただきます」（守総寺住職）渡辺晃純
・No.202 テーマ「合掌」（浮寒寺住職）藤波 龍
・No.203 テーマ「同朋」（倉 характерист者）本田康英
・No.204 テーマ「同朋」（南浜寺住職）戸次公正
・No.205 テーマ「他力」（広島大谷幼稚園）高築法輪
・No.206 テーマ「報恩」（城東保育園）長久寺徳瑞
・No.207 テーマ「信心」 池田正順
・No.208 テーマ「大悲」（大野幼稚園）藤 兼晃
・No.209 テーマ「我執」（松原保育園）中嶋尚真
・No.210 テーマ「懐悔」（願教寺住職）村上宗博
・No.211 テーマ「都生」（大谷大学短期大学部専任講師）大城邦義
・No.212 テーマ「自然」（同朋大学教授）田代俊孝
・No.213 テーマ「懸念」（願教寺住職）村上宗博
・No.214 テーマ「倒懸」（はすねだ保育園）川田彰心
・No.215 テーマ「願生」（宝林保育園）林 顕秀
・No.216 テーマ「懐心」（願教寺住職）村上宗博
・No.217 テーマ「待つ」（草津大谷保育園）高木文善
・No.218 テーマ「執着」（大野幼稚園）藤 兼晃
・No.219 テーマ「解放」（同朋大学教授）中村 稔
・No.220 テーマ「大悲」（守総寺住職）渡辺晃純
・No.221 テーマ「身勝手」（大野幼稚園）藤 兼晃
・No.222 テーマ「生活」（無碍光寺住職）高築法輪
・No.223 テーマ「都生」（大野幼稚園）藤 兼晃
・No.224 テーマ「子育て」（城東保育園）長久寺徳瑞
平野仁美

- No.225 テーマ「子育ち」（松原保育園）中崎顕美
- No.226 テーマ「子離れ」（宝林保育園）林顕秀
- No.227 テーマ「親離れ」（願仏寺住職）村上宗博
- No.228 テーマ「訓心」（徳化幼稚園）近藤正辰
- No.229 テーマ「満足」（光応寺保育園）古賀文雄
- No.230 テーマ「報恩」（明徳保育園）本田康英
- No.231 テーマ「懐桜」（すみれ保育園）近藤章

(8) 2008（平成21）年7月から2009（平成22）年9月（発行No.310からNo.324）
【牧野雅一（筑紫女学園大学教授）「保育心理」紹介シリーズ各項】
- No.310では、「特別な保育ニーズをもつ子どもの支援と保育者・保育心理士の役割」
- No.311では、「子どもの発達と保育～こころの発達とキーワード～」
- No.312では、「保育現場で出会う子どものつまずき」
- No.313では、「子どもたちのつまずきと付き合う」
- No.314では、「保育士の執を高める事例研究」
- No.315では、「事例研究の企画と運営」
- No.316では、「事例研究の企画と運営」
- No.317では、「事例研究に学ぶ①～子どもを前にした保育室での事例研究から～」
- No.318では、「事例研究に学ぶ②～保護者の支援にかかわる事例研究から～」
- No.319では、「事例研究に学ぶ③～保護者の支援にかかわる虐待の事例研究から～」
- No.320では、「事例研究に学ぶ④～保護者の支援にかかわる虐待の事例研究から～」
- No.321では、「保育スーパービジョン～保護者の支援にかかわる虐待の事例研究から～」
- No.322では、「保育真理援助法」
- No.323では、「保育真理援助法～サポートブックの具体的な作成方法①～」
- No.324では、「保育真理援助法～サポートブックの具体的な作成方法②～」

(9) 2009（平成21）年10月から2010（平成22）年9月（発行No.325からNo.336）
【1頁目：真宗保育理念解説題目（執筆者）富岡泰秀（大谷大学）】
- No.325 真宗保育理念について(1)「理念宣言の背景」
- No.336 真宗保育理念について(2)「なぜ「本願に生き」と確かめるのでしょうか？」
- No.337 真宗保育理念について(3)「とともに」ということ
- No.338・ No.339 真宗保育理念について(4)・(5)「子どもに学ぶ」
- No.340 真宗保育理念について(6)「真宗保育における花見つり」の「ねらい」
- No.342 真宗保育理念について(7)真宗保育のキーワード「関係づけ」
- No.343 真宗保育理念について(8)「関係づけ」（その2）…「やまう」
- No.344 真宗保育理念について(9)「関係づけ」（その3）…「やまう」
- No.345 真宗保育理念について(10)「関係づけ」（その4）…「やまう」
- No.346 真宗保育理念について(11)「真宗保育の保育者について」
【4頁目：牧野雅一「保育心理」シリーズ各項題目】
- No.347 「保育心理」シリーズ16 保育心理援助法～インクリアルアプローチ～
- No.348 「保育心理」シリーズ17 保育心理援助法～TEACCHプログラム～
- No.349 「保育心理」シリーズ18 保育心理援助法～行動療法（オペラント法～

—138—
大谷保育協会の「総合テーマ」についての研究

・No.328「保育心理」シリーズ 19 保育心理援助法～発音の気になる子～①
・No.329「保育心理」シリーズ 20 保育心理援助法～発音の気になる子～②
・No.330「保育心理」シリーズ 21 保育心理援助法～発音の気になる子～③
・No.331「保育心理」シリーズ 22 保育心理援助法～発音の気になる子～④
・No.332「保育心理」シリーズ 23 保育心理援助法～吃音の気になる子～
・No.333「保育心理」シリーズ 24 保育心理援助法～吃音の気になる子～②
・No.334「保育心理」シリーズ 25 保育心理援助法～吃音の気になる子～③
・No.335「保育心理」シリーズ 26 保育心理援助法～吃音の気になる子～④
・No.336「保育心理」シリーズ 27 保育心理援助法～吃音の気になる子～⑤

(10) 2010（平成22）年10月から2011（平成23）年10月（発行No.337からNo.349）
【1頁目：富岡高秀（大谷大学）担当内容の題目】
・No.337 真宗保育理念について(12)～真宗保育の保育者 2～
・No.338 真宗保育理念について(13). No.339 真宗保育理念について(14)真宗保育の行事【法時講】.
【成道会）、【涅槃会）、【彼岸会）
・No.341 真宗保育理念について(15)～真宗保育の行事「涅槃」
・No.342 真宗保育理念について(16)～真宗保育の行事「彼岸会）
・No.343 真宗保育理念について(17)～真宗保育の行事「花まつり）
・No.344 真宗保育理念について(18)～真宗保育の「子ども観」1-
・No.345 真宗保育理念について(19)～真宗保育の「子ども観」2-
・No.346 真宗保育理念について(20)～真宗保育の実習としての合掌・礼拝～
・No.347 真宗保育理念について(21)～真宗保育のお盆～
・No.348 真宗保育理念について(22)～「お彼岸」～
・No.349 真宗保育理念について(23)～収穫・実り～
<table>
<thead>
<tr>
<th>No.</th>
<th>項目</th>
<th>No.</th>
<th>項目</th>
<th>No.</th>
<th>項目</th>
<th>No.</th>
<th>項目</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>10</td>
<td>花まつり</td>
<td>11</td>
<td>クラスづくり</td>
<td>12</td>
<td>おばん（盂蘭盆会）</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>14</td>
<td>敬老の日</td>
<td>15</td>
<td>お泊り保育</td>
<td>16</td>
<td>文化の日</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>17</td>
<td>報恩講</td>
<td>18</td>
<td>お手伝い</td>
<td>19</td>
<td>お正月</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>20</td>
<td>「遊びの発展」</td>
<td>21</td>
<td>卒園式</td>
<td>22</td>
<td>カリキュラム</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>23</td>
<td>願いと注文</td>
<td>24</td>
<td>自然と幼児(1)</td>
<td>25</td>
<td>自然と幼児(2)</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>26</td>
<td>からだ</td>
<td>27</td>
<td>集団生活</td>
<td>28</td>
<td>集団生活(2)</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>29</td>
<td>集団生活(3)</td>
<td>30</td>
<td>言葉の発達(1)</td>
<td>31</td>
<td>言葉の発達(2)</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>32</td>
<td>音楽(1)</td>
<td>33</td>
<td>音楽(2)</td>
<td>34</td>
<td>造形(1)</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>35</td>
<td>造形(2)</td>
<td>36</td>
<td>文字(1)</td>
<td>37</td>
<td>文字(2)</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>38</td>
<td>列をつくる(1)</td>
<td>39</td>
<td>列をつくる(2)</td>
<td>40</td>
<td>よいこと・わるいこと</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>41</td>
<td>よいこと・わるいこと(2)</td>
<td>42</td>
<td>自由と自任</td>
<td>43</td>
<td>平等(I)</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>44</td>
<td>平等(II)</td>
<td>45</td>
<td>せずにいられないこと</td>
<td>46</td>
<td>「育つ」と「育てる」</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>47</td>
<td>無際・無恥(Ⅰ)</td>
<td>48</td>
<td>無際・無恥(Ⅱ)</td>
<td>49</td>
<td>無際・無恥(Ⅲ)</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>50</td>
<td>いじめ(1)</td>
<td>51</td>
<td>いじめ(2)</td>
<td>52</td>
<td>「やられたら、やり返せ」か？</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>53</td>
<td>社会性と社交性</td>
<td>54</td>
<td>独り遊はいけないか</td>
<td>55</td>
<td>みんなという迷信</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>56</td>
<td>選ぶ(1)</td>
<td>57</td>
<td>選ぶ(2)</td>
<td>58</td>
<td>選ぶ(3)</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>59</td>
<td>やさしさ</td>
<td>60</td>
<td>立場</td>
<td>61</td>
<td>「育つ」と「育てる」(再)</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>62</td>
<td>「育つ」と「育てる」(3)</td>
<td>63</td>
<td>「なぜ？」と問うこと</td>
<td>64</td>
<td>人の迷惑</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>65</td>
<td>自由を求める</td>
<td>66</td>
<td>管理と支配</td>
<td>67</td>
<td>幼児時代の懐出</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>68</td>
<td>象さんのハナクソ</td>
<td>69</td>
<td>苦悩</td>
<td>70</td>
<td>四歳児</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>71</td>
<td>四歳児(2)</td>
<td>72</td>
<td>一人ひとり(1)</td>
<td>73</td>
<td>一人ひとり(2)</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>74</td>
<td>一人ひとり(3)</td>
<td>75</td>
<td>歴史の意志(1)</td>
<td>76</td>
<td>歴史の意志(2)</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>77</td>
<td>お育て</td>
<td>78</td>
<td>感性と知性(1)</td>
<td>79</td>
<td>感性と知性(2)</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>80</td>
<td>僧侶の保育</td>
<td>81</td>
<td>僧侶の保育(2)</td>
<td>82</td>
<td>僧侶の保育(3)</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>83</td>
<td>環境</td>
<td>84</td>
<td>人権感覚</td>
<td>85</td>
<td>大悲・中悲・小悲(1)</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>86</td>
<td>大悲・中悲・小悲(2)</td>
<td>87</td>
<td>大悲・中悲・小悲(3)</td>
<td>88</td>
<td>子どもの眼</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>89</td>
<td>決意</td>
<td>90</td>
<td>自己表現(1)</td>
<td>91</td>
<td>自己表現(2)</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>92</td>
<td>自己表現(3)</td>
<td>93</td>
<td>自己表現(4)</td>
<td>94</td>
<td>自己表現(5)</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>95</td>
<td>遊びと環境</td>
<td>96</td>
<td>遊びと環境(2)</td>
<td>97</td>
<td>自己表現(3)</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>98</td>
<td>子どもの権利(1)</td>
<td>99</td>
<td>子どもの権利(1)</td>
<td>100</td>
<td>子どもの権利(3)</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>101</td>
<td>人間関係(1)</td>
<td>102</td>
<td>人間関係(2)</td>
<td>103</td>
<td>ほんね・たてまえの間に</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>104</td>
<td>絶対評価(1)</td>
<td>105</td>
<td>絶対評価(2)</td>
<td>106</td>
<td>領域「健康」</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>107</td>
<td>領域「健康」(2)</td>
<td>108</td>
<td>人間関係</td>
<td>109</td>
<td>不安について</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>No.110</td>
<td>環境(1)</td>
<td>No.111</td>
<td>環境(2)</td>
<td>No.112</td>
<td>環境(3)</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>--------</td>
<td>--------</td>
<td>--------</td>
<td>--------</td>
<td>--------</td>
<td>--------</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>No.113</td>
<td>環境(4)</td>
<td>No.114</td>
<td>環境(5)−人間関係−</td>
<td>No.115</td>
<td>言葉(1)</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>No.116</td>
<td>言葉(2)</td>
<td>No.117</td>
<td>言葉(3)</td>
<td>No.118</td>
<td>表現(1)</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>No.119</td>
<td>表現(2)</td>
<td>No.120</td>
<td>表現(3)</td>
<td>No.121</td>
<td>表現(4)</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>No.122</td>
<td>表現(5)</td>
<td>No.123</td>
<td>表現(6)</td>
<td>No.124</td>
<td>幼・保のこと</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>No.125</td>
<td>比較と対照</td>
<td>No.126</td>
<td>おおざっぱ</td>
<td>No.127</td>
<td>生活</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>No.128</td>
<td>興味と関心</td>
<td>No.129</td>
<td>真宗保育者の手紙</td>
<td>No.130</td>
<td>人間像と人間観</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>No.131</td>
<td>愛について</td>
<td>No.132</td>
<td>人間としてともに</td>
<td>No.133</td>
<td>自然保護</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>No.134</td>
<td>記憶</td>
<td>No.135</td>
<td>知進守退</td>
<td>No.136</td>
<td>であり(従順)</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>No.137</td>
<td>去此不遠</td>
<td>No.138</td>
<td>真宗保育者の手紙(2)</td>
<td>No.139</td>
<td>無我夢中</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>No.140</td>
<td>無我夢中(2)</td>
<td>No.141</td>
<td>家族と家庭</td>
<td>No.142</td>
<td>自己拡大</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>No.143</td>
<td>生命感覚</td>
<td>No.144</td>
<td>悪有仏性</td>
<td>No.145</td>
<td>自由保育</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>No.146</td>
<td>選ぶ</td>
<td>No.147</td>
<td>選ぶ(2)</td>
<td>No.148</td>
<td>題記載なし</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>No.149</td>
<td>具体的</td>
<td>No.150</td>
<td>具体的(2)</td>
<td>No.151</td>
<td>問いと答え(1)</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>No.152</td>
<td>問いと答え(2)</td>
<td>No.153</td>
<td>科学と保育</td>
<td>No.154</td>
<td>鳥敵・児敵・虫敵</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>No.155</td>
<td>義に依りて語に依らざるべし</td>
<td>No.156</td>
<td>仲よく</td>
<td>No.157</td>
<td>きまり</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>No.158</td>
<td>一番大切なもの</td>
<td>No.159</td>
<td>一番大切なものⅡ</td>
<td>No.160</td>
<td>知恩報徳</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>No.161</td>
<td>歴史に命じられて</td>
<td>No.162</td>
<td>社会に育てられて</td>
<td>No.163</td>
<td>自然に養されて</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>No.164</td>
<td>人権感覚</td>
<td>No.165</td>
<td>人権感覚(2)</td>
<td>No.166</td>
<td>みんなといっしょ</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>No.167</td>
<td>ドッコイ俺は生きてる</td>
<td>No.168</td>
<td>ええと子どもをつくるのか</td>
<td>No.169</td>
<td>雪、山をなす</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>No.170</td>
<td>仏恩報謝の念仏</td>
<td>No.171</td>
<td>息かであるということ</td>
<td>No.172</td>
<td>自己確立の一つの道</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>No.173</td>
<td>いのちを大切に</td>
<td>No.174</td>
<td>かかわること</td>
<td>No.175</td>
<td>個人と家庭</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>No.176</td>
<td>耳の庭に</td>
<td>No.177</td>
<td>食事は仏事である</td>
<td>No.178</td>
<td>額縁を壊さずに</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>No.179</td>
<td>詩的と散文的</td>
<td>No.180</td>
<td>身体と心と意識</td>
<td>No.181</td>
<td>&quot;子どもをつくる&quot;のか</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>No.182</td>
<td>ジャンケンの論理</td>
<td>No.183</td>
<td>失敗のスポーツ</td>
<td>No.184</td>
<td>バラバラでいっしょ</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>No.185</td>
<td>音声で</td>
<td>No.186</td>
<td>一紙琴</td>
<td>No.187</td>
<td>入涅槃と誕生</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>No.188</td>
<td>自帰依僧</td>
<td>No.189</td>
<td>ライフ・ワーク(1)</td>
<td>No.190</td>
<td>ライフ・ワーク(2)</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>No.191</td>
<td>「やられたらやり返せ」だけか？</td>
<td>No.192</td>
<td>みんなの赤ちゃん</td>
<td>No.193</td>
<td>「共に育つポイント」として</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>No.194</td>
<td>言葉により解釈された現実を絶対化して苦悩する人間を目覚ませるものまた、言葉による「呼びかけ」(名号)である</td>
<td>No.195</td>
<td>星の王子さま</td>
<td>No.196</td>
<td>生と死</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>No.197</td>
<td>罪業深重(御文貞目一通、聖典832頁)と罪悪深重(散弾抄一、聖典628頁)</td>
<td>No.198</td>
<td>個の確立</td>
<td>No.199</td>
<td>真宗保育遇難し</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>
平野仁美

註
(1) （幼稚園資料：2009年5月1日現在、保育所資料：2009年3月1日厚生労働省「社会福祉施設等報告」）
(2) 「真宗保育とは、なにか。この理念具現化する一つの手がかりとして、「でき
るだけ平易な表現」と「真宗教義を中心にした表現」の二通りを以下に示しま
す。「真宗保育とは」子どもが、そのままにして安心し、安心している子どもと
共にいることで、保育者が、自らの矛盾と、人間として生きる本当の意味をし
らされ、子どもも保育者も、自己の存在に喜びを感じる営みである。
「真宗保育とは」 宗祖親鸞聖人が明らかにされた教えを理解した念仏者の報恩行
である。その行は、釈迦の勧める諸善を修することを方便用門とし、弥陀の弘
願真実を証することを目標とする。その根幹は、現世において歓喜を証する浄
土真実の教行証である。「（2008 copyright (c) OTANI NURSERY SOCIETY, all right
reserved.）による
(3) 理念から問われるもの：「保育」は人と人の関係における営みであり、「悩み」
と「うなずき」の連続です。その無数の事柄を受け止めていくには、環境を改
善したり相手を説得したりする対処的な方法では本質に届きません。「ともに育
う」いう事柄が、私たちのどこで、そしてどのように成立するのか、と
いうことを確かめることが必要になります。本願に触れただとき、人は保育の営
みを通して、「人間とは、私とは」という問いにあい、すべての事柄が「私の
課題」として見出されます。そこに、真宗保育（「本願に生き、ともに育ち合う
保育」）の実践があります。」
（2008 copyright (c) OTANI NURSERY SOCIETY, all right reserved.）による
(4) 「本紙は、真宗大谷派の機関誌『真宗』に「幼児教化のページ」として掲載して
頂き、その内容は社団法人大谷保育協会に任せてきました。更に、そのペー
ージを別刷りにして『真宗保育』紙として関係各方面に送ることを許可して頂き、
その数は毎号3,300部となっています。『真宗』誌と『真宗保育』紙との掲載は、
宗教法人「真宗大谷派」と社団法人「大谷保育協会」との差異はあっても、人
間理解の根本に真宗仏教を展開することは、全く同じであることを表わします。」
（「真宗保育」No.200p1）
(5) 1982年9月20日発行「真宗保育」No.3p1
(6) 同上
(7) 同上
(8) 同上
(9) 1982年11月20日発行「真宗保育」No.5p4
(10) 同上

—142—
参考『真宗保育』・文献

・『真宗保育のあゆみー本協会社団法人設立 30 年ー』社団法人本協会、2008 年 8 月
・『真宗保育』＜1 号～349 号＞（社団法人本協会）1982 年 7 月～2011 年 10 月
・2008 copyright (c) OTANI NURSERY SOCIETY, all right reserved.
・『幼稚園教育要領・保育所保育指針の成立と変遷』民秋言、萌文書林、10 年 3 月、第 3 版
・『保育白書 2010』全国保育団体連絡会・保育研究所編、ひとなる書房、2010 年 10 月

（特別任用教授：保育原理／保育内容総論）